

<b>Title</b>	本の紹介：折口信夫著
<b>Author(s)</b>	濱田, 達夫
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学：論集, Volume8, 1993.10：101-109
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2992">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2992</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〔本の紹介〕

折口 信夫 著

- a 「神道の友人よ」(昭和二十二年一月)
- b 「民族教より人類教へ」(昭和二十二年二月)
- c 「神道宗教化の意義」(昭和二十一年八月講演、二十二年十月印刷)
- d 「神道の新しい方向」(昭和二十四年六月)

以上、いずれも折口信夫全集第二十卷「神道宗教篇」(中央公論社、文庫版もある)所収。

濱 田 辰 雄

折口信夫は、国学者・神道学者・民俗学者、また歌人「釋超空」として著名な人物である。その他、詩や小説・随想などの創作でも質の高い業績を挙げた人物である。國學院大学や慶応大学で教鞭をとった教育者でもあった。

この折口信夫が第二次世界大戦Ⅱ日本敗戦直後、いろんところで発表したのが以上の四篇である。この四篇は皆、共通した一つの主張を持っており、それを称して折口の「戦後神道論」と言う。戦後日本を迎えて、神道の根本改革を提唱したものである。

この神道改革の大テーマは二つである。一つは「神道の宗教化」であり、もう一つは「神道の国際化」である。もちろん両者はその根本でつながっている。そしてこの改革のモデルとなっているのがキリスト教であり、本誌に御紹介する所以である。

日本神道は自ら「宗教」となることを極力警戒してきた。今もそうである。地鎮祭違憲訴訟などにその性格がよくあらわれている。折口の説明によるとこういうことになる。

神道では、これまで宗教化するといふことをば、大變いけないことのやうに考へる癖がついてをりました。つまり宗教として取り扱ふことは、神道の道徳的な要素を失つて行くことになる。神道をあまり道徳化して考へてをります爲に、其から一步でも出することは道徳外れしたものゝやうにしてしまふ。神道は宗教ぢやない。宗教的に考へるのは、あの教派神道といはれるものと同様になると同じだといふ、不思議な潔癖から神道の道徳観を立て、宗教に赴くことを、極力防ぎ拒みして來てゐました。(四六三頁。d、所収)

日本神道は今なお、自らを日本国の国民精神もしくは国民道徳と位置づけていて決して声高に「宗教」と言うことはない。法律上やむなく「宗教法人」の地位に甘んじているというだけである。

折口は日本敗戦の根本に、この日本神道の自覚に起因する「宗教的情熱の不足」を見、それで神道の宗教化を言い出したのである。次のように言っている。

私は終戦前に、牧師の團體に古典の話をしたことがあるが、その時に牧師達は、記紀に現れてゐる物語の或ものが、我々のきりすと教の舊約聖書の神話と、殆同じだといふことを言ひ出した。それは、神道にも、きりすと教にも比較研究に値するものを、持つてゐるといふことになる。其人達のお話の中の、「或はあめりかの青年達は、我々と違つて、この戦争にゐるされむを回復する爲に起された十字軍のやうな、非常な情熱を持ち初め

てゐるかもしれない」といふ詞を聞いた時に、私は愕然とした。何故なら、日本人はその時、日本人の常に持つてゐる露悪主義が世間に露骨に出て、戦争に疲れ切つてゐた時だつたからである。さうして日本人はその時、神様に對して、宗教的な情熱を持つてゐなかつた。我々にも、十字軍を起すやうな情熱はないのだ。今度の戦争に、伊勢神宮や熱田神宮等の如く、多くの戦災神社があつた時に、誰が、十字軍の時によろろつば人の持つてゐたやうな、情熱を持つてゐたらうか。信仰の前途を憂ふる氣持はあつたが、それをどうしようといふ氣持ちは現れなかつた。つまり、世の中のさうした事々にも、個人の生活を考へる方へ傾いてゐて、戦災によつて、特に宗教情熱をよび起したものはなかつた。(四四五頁。C、所収)

戦後日本の再建のためにも「神道宗教化」は必須と折口は考えたのである。続く次の文章にも折口の氣持ちはよく表われている。

戦争中の我々の信仰を省みると神に對して悔いずには居られない。我々は様々祈願をしたけれど、我々の動機には、利己的なことが多かつた。さうして神々の敗北といふことを考へなかつた。我々は神々が何故敗けなければならなかつたか、と言ふ理論を考へなければ、これからの日本國民生活は、めちや／＼になる。私共は今でもひよつとすると、どうして敗けたかと言ふことを考へることがある。それは我々の長い幸福な生活の歴史から離れた、悲痛な現實が考へられるのだ。現在の境遇が現實と信じられなく思ふこともある。それほど我々は奇蹟を信じてゐた。神を宗教情熱的に信じてゐなかつたのに、奇蹟を信じてゐた。しかし、我々側には一つも現れず、向うばかりに現れた。それは、古代過去の信仰の形骸のみを持つてゐて、現に神を信じなかつたのだ。だから過去の信仰の形骸のみにたよつて、心の中に現實に神の信仰を持つてゐないのだから、敗けるのは信仰的に必然だと考へられた。つまり神の存在を信じない人ばかりになつた國である。若い時代を背負ふ人々

の心は荒れて、世の中に禮讓がなくなつて來た。昔は日本では、長い間禮讓が行はれて、道徳を愛好する人が、澤山ゐると考へられたほど、正義の生活が續いた。我々の生活から、すっかり宗教的な様式がなくなつてゐることが決つた今度の戰爭である。(四四六頁。C、所収)

「神道の國際化」は、神道宗教化の目的である。戦後日本が國際社会に対して有益な貢獻をするためには、どうしても神道を國際化し、宗教化しなければならぬのである。

神道は普遍化に大いに努力しなくてはならない。いすらえる・えぢぶと地方に起つた信仰がだんく擴つて、遂に今日のさきりすと教にまでなつたやうに、神道の中にある普遍化すべき要素を出来るだけ廣めてゆくことは大切である。我々が幸福であるやうに人類全體も亦幸福にすることは、我々の持つよき素材を人類に寄與する、せめてもの貢獻である。其爲にも神道のよき精神を普遍化した、神々の宗教化が必要なのである。

(四三八〜四三九頁。b、所収)

さて神道の宗教化・國際化の細目については次のように提言されている。以下、順不同でそれらを紹介していく。

①教主の出現

教主とは教主のことである。宗教にはどうしても教主が要る。折口の文章はこうである。

私どもの情熱が、何時になつたら、その私どもの情熱を綜合して、宗教神道を、私どもに與へてくれる教主の出現を、實現させることが出来るか。その時こそ、私ども神道宗教儀禮傳承者の生活を、一舉に光明化してくれる——世の曙の將來者の來訪である。(四三四頁。a、所収)

これは「宗教の正しい自覚者」(四三三五頁。a)とか「正しい教養を持つて、正しい立場を持った祖述者」(四六四頁。d、所収)とも言われている。

宗教は自覺者が出て來ねばならぬので、さう註文通りには行かぬ。であるから其教祖が現れて來なければ、我々の望むやうな宗教が現れて來ないのは當然だ。本道に古來の神道的信仰を知り盡してくれた人が自覺者として、神道に其を具現してくれたらよい。本流神道をば、如何に宗教化して行かねばならぬかといふことを考へると、従來の神道の神話傳説の信仰を、つらぬいた信仰をもつた宗教といふものを出して來る教祖が出て來る苦だ。我々は教祖ではない。従來の神道の痕跡に對して、それを正し、整理した形を與へて行く學者にすぎない。つまり我々の過去の研究ばかりでは、實際家の爲に提供したにすぎない。過去のものを研究して、それを未來の用意にせねばならない。將來の神道發達の爲に、貢獻する宗教的自覺者が出ないといふことは寂しい。つまり、我々は神道の學者であるが、お互に、本道の神道を解決する自覺者の出現を望まないのは間違ひだ。そこから本道の神道の出發が、始まるとも言へるのである。(四五六頁。c、所収)

## ②教典の決定

これはキリスト教でいう「正典」聖書」のことである。宗教の性格と質を決定するのに正典なしには考えられない。折口の言葉はこうである。

古事記・日本紀乃至は古語拾遺から舊事記の末に到るまで、そのまゝ聖書とはなるものではない。此問題は、どう考へて行くべきか、私どもは考へ貫かねばならぬのである。又聖典といへば、同時に其等の神書類を思ひ浮かべた、私どもの此までの感じ方は十分考へ更めばねばならぬ。少くとも私ども神道の宗教家は、大いに結集を催して、教典を決定する方に向つたらどうだらう。さう言ふ欲望をまだ持つて來ないのだらうか。

(四三六頁。a、所収)

「いづこに、私どもは、宗教生活の知識の泉たる教典を求めればよいか」(四三四頁。a、所収)、これが折口の問題意

識である。

### ③ 教会の形成

日本神道は国民精神であり国民道徳であるから、ことさら一党一派を作る必然は全く無い。しかし折口はそこに宗教的情熱の不足の因を見たのであるから、神道の宗教化のためにはどうしても信仰者の集団を形成せねばならないということになる。

如何にして、神社が——神道の定義において、正しい教會となり得るか。(四三四頁。a、所収)

私どもには切つても切れぬ、久しい関係を結んでいる氏子があつた、信徒があつた。この人々との関係はどうあつても、官吏と人民といつたものであつてはならなかつた。(四三三頁。a、所収)

この線を押し進めていけば確かに本流神道は形を変えていかざるを得ない。相当な改革、と言わざるを得ない。

### ④ 教義の確立

宗教、と言つても宗教学で分類する創唱宗教だが、宗教には教義がどうしてもなくてはならない。それゆえ宗教であることを自ら否定している神道本流は教義を立てることに消極的にならざるを得ない。折口はここに果敢に改革のナタをふるい始めたのである。

其とも一つ。其よりもつと重大なことかとも思ふが——教義を持たないことに、不満を感じる宗教家が神道には居ないのだらうか。尤、今日までの有様では、神社の神々はあつても、宗教としての神或は、神々はなかつたと同じなのだから、どの神を信じる人々、どの神々の啓示によつて成立した宗教と言ふことも出来ぬのだから、落漠とした神道のすべての神々による教義と言ふやうなものは、立てやうもなかつたのである。

(四三六〜四三七頁。a、所収)

そして神道本流にとってはその根幹から揺さぶられるような三つの教義内容の改変を折口は提起する。その第一は、天皇と神とを分離する、ということである。次に紹介するように、神道を世界宗教にするためにもどうしてもしなければならない案件と折口は考えた。

今まで神道が眞の宗教とならなかつたのは、多くの障碍があつたからだ。それは先第一に、我々自身が神道を宗教として認めなかつたことであるが、現在は幸、此心配はなくなつた。第二には、神道と宮廷との關係が非常に深かつたことが大きな障碍だつた。神道と宮廷とが特に結ばれて考へられて來た爲に、神道は國民道德の源泉だと考へられ、餘りにも道德的に理會されて來たのである。この國民道德と密接な關係のある神道が、世界の宗教になることはむづかしい。それはだん／＼人類とは遠のいた道德となり、世界の人に關係の少いものになつてしまふ。そんな神道が世界的な宗教となるべき筈はないのである。宮廷と結びついてゐた神道は、こんな不都合な點をもつてゐた。併しながら天皇は先に御自ら「神」を否定し給うた。それにより我々は、これまでの神道と宮廷との特殊な關係を去つてしまつた、と解してよい。(四四〇頁。b、所収)

この問題は祖先神と宗教の神とを區別するという内容をも含んでいる。天皇は何よりも万世一系の神として祖先神の代表であるからだ。

本当のことを言ふと、日本人は祖先神と神様とを結びつけるといふ傾向があるが、これは誤りではないかと思ふ。(中略)高御産巢日神・神産巢日神も祖先神として記録しているが、この二神はどう考えても祖先神ではない。昔から日本人は、偉い神々を祖先神と考へやすかつたのだ。(四五八頁。c、所収)

先我々が、神様と人間との系図を分離することから考へねばならぬ。つまり、系図につながっている神と、それにつながれぬ神とを區別して考へねばならぬ。それによつて系図につながる神と、宗教上の神とが岐れて來



る。(四六〇頁。c、所収)

第二は、日本の神々を一神的に整理する、ということである。

一體、日本の神々の性質から申しますと、多神教的なものだといふ風に考えられて来ておりますが、事実に  
おいては日本の神を考えます時には、みな一神的な考え方になるのです。たとえば、澤山神々があつても、日本  
の神を考える時には、天照大神を感じる、或は高皇産靈神を感じる、或は天御中主神を感じるといふように、  
一個の神だけをば感じる考え癖といふものがあります。(四六五頁。d、所収)

これ以外にも数回、日本神を一神的にとらえるべきことを折口は主張している。

第三は、日本神に創造神の性格を持たせる、というものである。古事記その他を読んでも、日本神はすべて自然に  
生あれました神々ばかりで、創造神らしきものはどこにも見当らない。それを折口はこのように新説を展開していく。

それは、高皇産靈神・神皇産靈神と言つてゐる——、あの産靈神の信仰です。字は、産むの「産」、たましひの  
「靈」で、魂を産むという風に宛てられてゐますが——、神自身の信仰はさうでなく、生きる力を持った體中へ、  
魂をば植ゑつける、或は生命のない物質の中へ魂をば入れる、さうすると魂が発育するとともに、それを容れ  
てゐる物質が、だん／＼育つて来る。物質も膨れて来る。魂も發育して来るといふ風に、兩方とも成長して參  
ります。其一番完全なものが、神、それから人間となつた。その不完全な、物質的な現れの、最著しく、強  
力に示したものが、國土或は島だ、と古代人は考へました。それが日本の大昔の神話に現れてゐる、大八洲國  
の出來たといふ物語り、或は神々が生まれたといふ物語りです。

つまり神によつて體の中に結合せられた魂が、だん／＼發育して来る、それとともに物質なり肉體なりが、ま  
た同時に成長して来る、その聖なる技術を行ふ神が、つまり高皇産靈神・神皇産靈神、即むすびの神でありま

す。つまり靈魂を與へるとともに、肉體と靈魂との間に、生命を生じさせる、さういふ力を持った神の信仰を、神道教の出發點に持つてをります。それで考へ易い誤りがあつて、日本には昔から、その産靈神をば祖先として考へてゐる家々もありました。

おなじ考へ方からして、古代の書物に、これを宮廷の祖先といふ風にも考へてゐるのです。皇祖とか祖宗とか書いてあります神の中には、この高皇産靈神・神皇産靈神たちを申してゐる例も多いのです。併しよく考へますと、魂を植ゑつけた神で、人間神ではないのです。(四六九〜四七〇頁。d、所収)

これも一ヶ所しか引用できなかつたが、数ヶ所でこの自説を展開している。

以上で、本書の紹介を終わるが、本書が日本のキリスト教を考える上で多くの示唆を与える書物であると確信する。そして日本人キリスト者が自らに与えられた遺産がいかに大いなるものであるかを自覚するよすがになると思う。日本が国際社会で有益な貢献をなし得るためには、どうしてもキリスト教的な構造の宗教が必要なのだ。